

恋愛関係が青年の発達に及ぼす影響

— 多次元自我同一性尺度と恋人の有無・交際期間・愛情との関連から —

片岡 祥¹⁾・園田直子²⁾

要 約

本研究は、恋愛関係が青年の発達に及ぼす影響について検討した。青年の発達の指標として谷(2001)の作成した多次元自我同一性尺度(Multidimensional Ego Identity Scale: MEIS)を用いた。調査対象者は大学生129名であった。恋人の有無によってMEIS得点に差異があるか検討したところ、有意差は見られなかった。また、交際期間の長さの違いで恋人のいる参加者を群分けし、交際期間の長い群と短い群のMEIS得点を比較したところ有意差は見られなかった。さらに、恋人への愛情の3要素(親密性、情熱、コミットメント)とMEISとの関連について重回帰分析によって検討を行ったところ、MEISの得点と親密性及び情熱には正の関連が見られた。これらの結果から、良好な恋愛関係を構築していくことが青年の発達に有益に働くことが示唆された。

キーワード: 恋愛関係, アイデンティティ, 愛情の3要素, 恋人の有無, 交際期間

問 題

恋愛関係が青年の発達に及ぼす影響

恋愛関係を構築することは青年の発達に大きな影響を及ぼすことがしばしば指摘されてきた。Hendrick & Hendrick (1988) や Long (1983) は現在恋人がいる者といない者とを比較した結果、恋人がいる者はいない者に比べて自尊感情が高いことを見出している。同様に、神園・黒川・坂田(1996)も恋人がいる者はいない者に比べて、自尊心や充実感が高く、抑うつ程度が低いことを報告している。Aron, Paris & Aron (1995) は恋愛関係を開始する前よりも開始した後のほうが自尊感情や自己効力感が高まることを見出している。Ditch (1978) は過去3年間に恋愛経験をしていない者に比べて、恋愛経験をしている者のほうが自己実現の程度が高いことを示している。これらの研究から見出された知見は、恋愛関係を構築する経験をしていることが、青年の自己に対する捉え方を肯定的に

変化させる契機となることを示しているといえよう。

また、多川(2002)は恋愛関係の親密化が「協調性・誠実性」及び「主張性」といった対人関係に関する見方や捉え方に影響を及ぼすことを示している。さらに、多川(2003)は恋人がいる者に対して面接法を用いた縦断調査を行いその結果から、恋愛関係を通して「本音を率直に語る」ようになることや「相手に配慮して行動する」といった対人関係に関する変化が見出されたことについても報告している。高坂(2009)は恋愛関係が青年に及ぼす影響について尺度を作成してまとめた結果、従来の研究で示されてきた自己に関する側面に加えて、「他者評価」因子を見出しており、恋愛関係を持つことが他者からの評価が上昇すると認知される可能性がある点について指摘している。これらのことから恋愛関係は青年の自己観に加えて、他者に対する見方や捉え方に関しても肯定的に変化させる契機となることが考えられる。

1) 久留米大学大学院心理学研究科
2) 久留米大学文学部

恋愛関係による青年の発達指標

なぜ恋愛関係を構築すると青年の発達に影響を及ぼすのか。Aronら(1995)はAron&Aron(1986)の自己拡張モデルの観点から、Ditch(1978)はMaslowの人間観を土台に、Long(1983)はErikson(1950)のアイデンティティ論の観点から青年期に親密性を獲得することと恋愛関係を関連付けており、多川(2002, 2003)は関係の親密化という観点から、神園らは(1996)は社会適応や自己概念の差異という視点から恋愛関係が青年に及ぼす影響について論じている。このように、恋愛関係を構築することが青年に及ぼす影響について様々な視点から論考がなされているが、本研究では、恋愛関係を体験することによる青年の発達という点に着目してアイデンティティ概念に焦点をあてる。

Erikson(1950)は成熟した恋愛関係を構築していくためには、アイデンティティの確立が必要であることについて指摘している。また、大野(1995)はアイデンティティが確立していない状態で構築する恋愛関係を「アイデンティティのための恋愛」と概念化しており、このような恋愛関係が継続することの困難さについて指摘している。一方で、アイデンティティの確立には、自己の側面に加えて親密な関係性も大きな影響を及ぼすことが考えられるとされており、山田・岡本(2008)は「個」と「関係性」の観点からアイデンティティを捉える試みを行っている。つまり、恋愛関係が継続するためにはアイデンティティが確立していることが必要であるとともに、恋愛関係を通してアイデンティティを確立していくということが考えられるのである。

恋愛とアイデンティティとの関連を扱った研究では、北原・松島・高木(2008)は男女別に参加者を群分けし、恋人の有無や交際期間の長さによってアイデンティティの確立の程度に違いが見られるかについて検討し、恋人の有無によってアイデンティティ得点に差異が見られたことを報告している。また、キン(2009)は交際相手の選択基準に自身のアイデンティティの確立の程度が影響を及ぼすことを報告するなど、恋愛とアイデンティティとの関連が検討されており、恋愛関係をアイデンティティという枠組みで捉えることの妥当性が示されてきている。

本研究ではアイデンティティを測定するために谷(2001)の作成したMEIS(Multidimensional Ego Identity Scale:多次元自我同一性尺度)を用いる。MEISは「自己同一性・連続性(自分が自分であるという一貫性, 不変性の感覚)」, 「対自的同一性(自分の

目指すものや望むものが明確に意識されている, 自己意識の明確さの感覚)」, 「対他的同一性(他者から見られている自分自身が本来の自分自身と一致しているかどうかの感覚)」, 「心理社会的同一性(現実の社会の中での自分の意味づけの感覚)」の4つの因子からなる尺度である。これまでにアイデンティティを測定するために開発された尺度には様々なものがあるが、谷(2001)はそれらのアイデンティティ尺度の多くはEriksonの理論との対応が明確でなく、また信頼性や妥当性の検証が不十分であることが指摘している。その点を踏まえて作成されたMEISは作成過程において複数の観点から信頼性や妥当性が検証されている。また、MEISを用いた研究においても繰り返し信頼性や妥当性が確認されていることから(稲垣, 2007; 松下・橋村, 2009; 松下・吉田, 2010; 西山・富田・田爪, 2007; 山本・岡本, 2009), アイデンティティを測定する尺度として適切であるといえる。

しかしながら恋愛関係を構築することが青年に及ぼす影響を検討した研究の中で、アイデンティティ尺度としてMEISを用いたものは見られない。そこで、MEISで測定されるアイデンティティが北原ら(2008)と同様に恋愛関係を構築・維持することによって影響を受けるのかどうかを検討する必要がある。この点について、本研究では北原ら(2008)と同様に、恋人の有無及び恋人がいる者のうち交際期間の長さの違いによってMEIS得点に差異が見られるのかどうかについて検討を行う。

どのような恋愛関係が青年の発達に影響を及ぼすのか

本研究は恋愛関係が青年の発達に及ぼす影響について検討するわけであるが、このような視点で行われた研究の多くは恋人の有無を独立変数として心理的指標を比較するものがほとんどであった。このことは、恋愛関係を構築する経験が青年に様々な影響を及ぼすことを明らかにする反面、現在の恋愛がどのような関係であるのかということが青年の発達に及ぼす影響について明確になっていないという問題点を残している。しかし、恋愛行動には段階が存在し(松井, 1990), そのような段階の違いによって愛情に差異がみられるということや(松井, 1990, 1993), 恋愛の熱愛度の高さが高い対人スキルと関連すること(堀毛, 1994), 恋愛関係が深まるにつれて恋人に対する否定的感情が高まるという報告もなされている(立脇, 2007)。従って、現在の恋愛関係がどのような関係であるのかを無視して、恋愛関係が青年の発達に及ぼす影響について論じることではできない。

どのような恋愛関係であるかということ明らかにする観点には、熱愛度（堀毛，1994）のように恋愛関係の状態に焦点を当てる立場や、恋愛行動の段階（松井，1990）のように恋愛関係の進展度を指標とする立場、あるいはラブスタイル（Lee，1973）や愛着スタイル（Hazan & Shaver，1987）のように恋愛における個人差の観点から検討する立場があるといえるが、これらの観点は恋人との関係性についてあまり考慮していないといえる。片岡・園田（2010）は恋人がいる大学生のうち、自身の恋人を「頼れると感じる人物」とすると回答したものは24.0%に過ぎなかったことを報告している。このことは、恋人が必ずしも信頼感や安心感を提供する対象となるとは限らないことを示している。また、高坂（2010）は、回答者が自身の恋人のアイデンティティの確立の程度を高く推測している者のほうが低く推測している者に比べて、自身のアイデンティティの確立の程度が高かったことを報告している。このことから、恋人との関係性が青年の発達に影響を及ぼすことが考えられる。

本研究では恋人との関係性に関して、Sternberg（1986，1997）の提唱した愛情の三角理論（Triangular theory of love）の観点から検討を行う。彼は、親密な対人関係における愛情を「親密性（親しさや結合といった感覚）」、「情熱（身体的魅力や性的達成に関する動因）」、「コミットメント（関係への関与や認知的決定）」の3つの要素から捉えることを提唱した。愛情の三角理論は、簡潔性と柔軟性において洗練された理論であるとされている（Hendrick & Hendrick，2000）。本邦においても金政・大坊（2003）によって愛情の3要素を測定する尺度（Triangular Love Scale：TLS）の邦訳版が開発され、尺度の信頼性と妥当性が示されている。厳密に言えば、ここで測定される愛情の3要素は2者間の関係において3つの要素がどの程度であるかを測定しているというよりも、各個人が相手との関係において3つの要素がどの程度であると認知しているかを測定している。

では、恋人に対する愛情の3要素のうち、青年の発達と関連するのはどの要素であろうか。金政・大坊（2003）によると、愛情の3要素は自己認知と正の関連があったことが示されている。これは、愛情の高い関係を形成することが自己に対する認識を肯定的に変化させることを示唆している。また、彼らはTLSを用いて恋人との交際期間の長さや愛情の3要素との関連について検討を行っている。その結果、恋人との交際期間が長い者は短い者に比べて「親密性」や「コミッ

トメント」の要素が高かった。このことから、長期的な関係の継続には「情熱」の要素よりも「親密性」や「コミットメント」の要素が重要になってくることが考えられる。これらのことから、愛情の3要素の中でも、関係の継続に必要な「親密性」と「コミットメント」の要素がアイデンティティと関連している可能性がある。

そこで、本研究では恋人との関係性についてTLSを用いて恋人に対する愛情の3要素を測定し、MEISで測定されるアイデンティティの各因子の得点との関連を検討することで、恋愛関係にどのような愛情の要素があることが青年の発達に影響するのかについて探索的に検討を行う。

本研究の目的

以上を踏まえて本研究では、(1)、MEISで測定されるアイデンティティが恋愛関係を構築・維持することで影響を受けるのかどうかを明らかにするために、恋人の有無と交際期間の長さの違いによってMEISの得点に差異が見られるかについて検討を行う。(2)、恋人との関係性が青年の発達に及ぼす影響について明らかにするためにMEISとTLSとの関連について検討を行う。これらの分析を行うことにより、従来あまり検討されてこなかった、「どのような恋愛関係であることがアイデンティティに影響を与えるのか」を明らかにすることができると考えられる。これによって、青年期において形成される親密な対人関係の1つである恋愛関係が青年の発達に及ぼす影響について検討することができよう。

方 法

調査対象者

調査対象者は福岡県内のA大学の大学生129名（男性19人、女性108人、平均年齢20.7歳）であった。調査対象者のうち恋人がいる者は54名（男性9人、女性45人）、恋人がいない者は75名（男性10人、女性64人、不明1人）であった。なお、今回は男性のデータ数が少ないため性差の検討は行わなかった。

質問紙

①属性に関する項目：性別、年齢、恋人の有無、恋人がいる者は恋人との交際期間についても答えてもらった。その後、以下の尺度について「まったく当てはまらない」から「非常に当てはまる」の7件法で答えてもらった。

②MEIS（Multidimensional Ego Identity Scale；多次元自我同一性尺度、谷（2001））。MEISは、自我同一

表1 恋人の有無における MEIS と TLS の平均値と標準偏差

	恋人あり(n=54)		恋人なし(n=75)		
	M	SD	M	SD	
交際期間	21.25	23.42	30.88	38.51	
MEIS	自己斉一性・連続性	4.5	1.1	4.4	1.4
	対自的同一性	4.4	1.1	4.1	1.2
	対他的同一性	3.9	1.3	3.8	1.2
	心理社会的同一性	4.3	0.7	4.1	0.7
TLS	親密性	5.0	1.1		
	情熱	4.9	1.2		
	コミットメント	4.8	1.1		

表2 交際期間の長さの違いにおける MEIS と TLS の平均値と標準偏差

	恋人あり				
	交際期間長い群(n=27)		交際期間短い群(n=27)		
	M	SD	M	SD	
交際期間	34.96	26.34	7.55	5.25	
MEIS	自己斉一性・連続性	4.6	1.1	4.4	1.1
	対自的同一性	4.3	1.0	4.5	1.0
	対他的同一性	3.9	1.2	4.0	1.2
	心理社会的同一性	4.3	0.6	4.2	0.6
TLS	親密性	5.4	0.8	4.6	0.8
	情熱	4.8	1.0	4.9	1.0
	コミットメント	5.1	1.1	4.5	1.1

性の第V段階における同一性を測定する尺度である。MEISは「自己斉一性・連続性」5項目、「対他的同一性」5項目、「対自的同一性」5項目、「心理社会的同一性」5項目の4つの下位尺度から構成されている。

③ TLS (Triangular Love Scale: 愛情の三角理論尺度, 金政・大坊 (2003))。恋愛関係における愛情の3要素を測定する尺度である。TLSは「親密性」10項目、「情熱」10項目、「コミットメント」7項目の3つの下位尺度から構成されている。本研究ではそれぞれの因子について因子付加量の高いものから5項目を選んで用いた。なお、TLSは恋人がいる者のみ答えてもらった。

結果

恋人の有無と交際期間の長さ

表1は恋人がいる者といない者のMEISの下位尺度得点の平均値を示したものである。それぞれの得点について群間でt検定を行ったところ、どの下位得点についても群間に差は見られなかった。

また、恋人がいる者を対象に、交際期間の平均値(21.25カ月)を基準に参加者を半分に分類し、長い者から半数を交際期間の長い群(n=27)、残りを交際期間の短い群(n=27)に群分けした。表2はそれぞれの群のMEISの下位尺度得点の平均値である。それぞれの得点について群間でt検定を行ったところ、

の下位尺度得点においても群間に差は見られなかった。

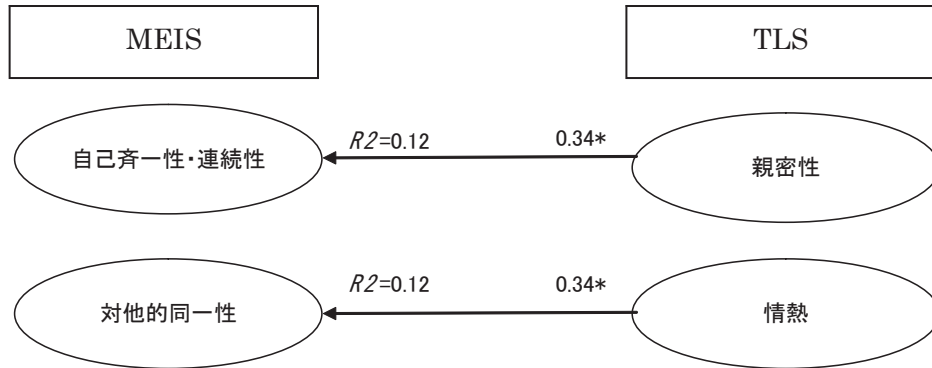
恋愛関係の要素

恋人がいる者のTLS尺度の下位尺度得点とMEIS尺度の下位得点を用いてステップワイズ法による変数選択を行った後、重回帰分析を行った(図1)。その結果、TLSの「親密性」とMEISの「自己斉一性・連続性」との間に有意な正の関連がみられた($\beta = .34, p < .05$)。また、TLSの「情熱」とMEISの「対他的同一性」との間に正の関連がみられた($\beta = .34, p < .01$)。

考 察

恋人の有無及び交際期間の違いとアイデンティティの関連

本研究の結果から、恋人の有無によってMEISの得点に差はみられなかった。北原ら(2008)の報告では恋人の有無によってアイデンティティ得点に差異があったことを見い出しており、恋人の有無と自己概念や他者概念の変化を扱った多くの研究においても差異が見い出されている。MEISを用いた本研究の結果はこれらの報告とは異なるものであった。また、本研究では恋人との交際期間の長さの違いによってアイデンティティ得点に差異はみられなかった。北原ら(2008)



* $p < .05$

注)パス係数の値は標準偏回帰係数、有意なパスのみ表示

図1 MEISとTLSとの関連

の報告では交際期間が2年以上の者と2年未満の者の間のアイデンティティ得点に差異があったことを見出している。交際期間が2年を境に関係性がより強固なものとなることは様々な研究者が論じているが、例えば愛着理論をベースに研究を行った Hazan & Zeifman (1994) は恋人が安心して頼れる対象となるためにはおよそ2年ほどの交際期間が必要であることを明らかにしている。本研究の参加者のうち、交際期間の長い群の平均交際期間は約3年であり、交際期間の短い群の平均交際期間は約8カ月であったことを考えると、MEISで測定されるアイデンティティという概念は、恋人の有無や交際期間の長さの違いによる影響を受けないものである可能性と、恋愛関係において生じる青年の変化や成長にはそもそも恋人の有無や交際期間が関与していない可能性という2つの可能性が考えられるといえ、この点については今後より詳細な検討が必要である。

愛情の3要素とアイデンティティとの関連

TLSで測定される愛情の要素とMEISで測定されるアイデンティティとの関連を検討したところ、TLSの「親密性」とMEISの「自己斉一性・連続性」、TLSの「情熱」とMEISの「対他的同一性」との間に正の関連がみられた。このことから、愛情の要素のうち「親密性」と「情熱」の高い関係であることが、MEISの得点の高さにつながっていることが明らかとなった。愛情の要素のそれぞれが、アイデンティティの異なる領域に影響を及ぼしていることは興味深い。

愛情の3要素のうち、「親密性」と「自己斉一性・連続性」に正の関連が見られたことは本研究の仮定どおりであったが、「コミットメント」とアイデンティティの間に関連が見られなかったことは予測と異なっていた。親密な2者関係の継続には「親密性」と「コミットメント」という要素が重要であることは問題部分でも述べたとおりであるが、このうち「親密性」は親しさや結合といった愛情の情緒的な側面を測定していると考えられる。一方で、「コミットメント」は関係の関与や継続意志を測定していると考えられる。アイデンティティと「親密性」には正の関連があり、「コミットメント」とは関連が見られなかったことは、恋愛関係における情緒的な側面がアイデンティティの確立に影響を及ぼすことが示唆される。その中でも、「親密性」と正の関連が見られた「自己斉一性・連続性」という概念は、「自分が自分であるという一貫性、不変性の感覚」とされている。親密性の高い恋愛関係を維持していくためには、互いが互いに一貫して情緒的な感情を向ける人物であると実感できることが重要であるがために、自己の一貫性や普遍性という感覚が高まるのかもしれない。

また、本研究では愛情の要素のうち、「情熱」の要素がアイデンティティの各因子と関連することについては仮定していなかったが、分析の結果「情熱」の要素は「対他的同一性」と関連がみられた。「情熱」とは、「身体的魅力や性的達成に関する動因」とされ、「対他的同一性」とは「他者から見られている自分自身が本

来の自分自身と一致しているかどうかの感覚」とされている。恋人に対して身体的な魅力や性的な関心を持つことは、一方で恋人から自身が恋人としてどのように捉えられているのかを考え、自己に対する捉え方と恋人から自己がどのように捉えられているのかを考える契機となるのかもしれない。

また、愛情の3要素と MEIS で測定される「対自的同一性（自分の目指すものや望むものが明確に意識されている、自己意識の明確さの感覚）」には関連が見られなかった。園田・片岡（2008）は恋人がいる者を対象に恋愛関係における時間展望を測定する「関係版時間的展望尺度」（Experimental Time Perspective Scale in Close Relationships: ETPS-CR）を用いて調査を行っているが、それによると、7点満点中「目標」因子が4.02点、「希望」因子が4.81点、「充実」因子が4.98点であった。このことは、恋愛関係において意識されるのは関係性に対する現在の充実度や未来への希望であり、恋愛関係における目標ではないことが伺える。「対自的同一性」を自己の目標であると考えれば、どのような恋愛関係であっても関連しないことは当然であるのかもしれない。但し、恋愛関係が夫婦関係へと発展する可能性がある場合には、結婚という恋愛関係の中で生じる共通の目標が自己が持つ目標へと影響を及ぼす可能性があるだろう。その際に、愛情の高い関係であることがより自己の目標を意識することは考えられることであるため、「対自的同一性」が高くなるかもしれない。

同様に、愛情の3要素と「心理社会的同一性（現実の社会の中での自分の意味づけの感覚）」は関連が見られなかった。これは、恋愛関係が嫉妬や排他性の高い関係であり、社会的な関係性とは隔離されがちであることが関係しているのかもしれない。但し、この点についても、結婚が意識される恋愛関係においては本研究結果とは異なる可能性がある。なぜなら、恋愛関係は2者関係で閉じていることが許される関係であるが、結婚し夫婦関係を構築する場合は他の社会的な関係と交わることが求められる。その際に、社会の中で恋愛関係を通して自己の意味づけが行われていく可能性は十分に考えられることから、愛情の高い関係であることがより「心理社会的同一性」を高めることになるとのかもしれない。

以上、本研究では恋愛関係が青年の発達に及ぼす影響について、MEISで測定されるアイデンティティと恋人の有無、交際期間の長さ、TLSで測定される愛情の3要素の観点から検討を行った。その結果、恋人の

有無や交際期間の長さはアイデンティティとは関連が見られなかった。アイデンティティと関連が見られたのは愛情の3要素であった。このうち、MEISの「自己斉一性・連続性」とTLSの「親密性」、MEISの「対他的同一性」とTLSの「情熱」にそれぞれ正の関連が見られた。

本研究の結果から、恋人と性的な関心を伴った情緒的な関係性を構築することが青年の自己や他者との関係の中で構築されるアイデンティティと関連することが示された。このことから、恋人と良好な関係を構築していくことが青年の発達に影響を及ぼすことが示唆されたといえるだろう。

引用文献

- Aron, A., Paris, M., & Aron, E. N. 1995. Falling in love: Prospective studies of self-concept change. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 1102-1112.
- Aron & Aron 1986. *Love and the expansion of self: Understanding attraction and satisfaction*. New York: Hemisphere.
- Dietch, J. 1978. Love, sex, roles and psychological health. *Journal of Personality Assessment*, 42, 626-634.
- Erikson, E. H. 1950. *Childhood and society*. New York: Norton. (エリクソン, E. H. 仁科弥生(訳)(1977). 幼児期と社会 みすず書房).
- Hazan, C., & Shaver, P. R. 1987. Romantic Love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, p511-p524.
- Hazan, C., & Zeifman, D. 1994. Sex and the psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships*, 5, (pp.151-178). London: Jessica Kingsley.
- Hendrick, C., & Hendrick, S. S. 1988. Lovers were rose colored glasses. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, p161-p183.
- Hendrick, S. S. & Hendrick, C. 2000. Romantic Love. In C. Hendrick & S. S. Hendrick (Eds.), *Close Relationships*. Thousand Oaks, CA: Sage, p203-p215.
- 堀毛一也 1994. 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, p116-p128.
- 稲垣実果 2007. 自己愛的甘え尺度の作成に関する研究 パーソナリティ研究, 16(1), p13-p24.
- 神蘭紀幸・黒川正流・坂田桐子 1996. 青年の恋愛関係と自己概念及び精神的健康の関連 広島大学総合

- 科学部紀要：理系編，22，p93-p104.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003. 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究，10(1)，p11-p24.
- 片岡 祥・園田直子 2010. 青年期に起こる愛着対象の移行における親の位置づけ 久留米大学心理学研究，9，p1-p8.
- キンイクン 2009. 青年期における恋愛相手の選択基準とアイデンティティ発達との関係 立教大学心理学研究，51，p131-p142.
- 北原香緒里・松島公望・高木秀明 2008. 恋愛関係が大学生のアイデンティティ発達に及ぼす影響 横浜国立大学教育人間科学部紀要：教育科学，10，p91-p114.
- 高坂康雅 2009. 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と，交際期間，関係認知との関連 パーソナリティ研究 17(2)，p144-p156.
- 高坂康雅 2010. 大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連 発達心理学研究，21(2)，p182-p191.
- Lee, J. A. 1973. *The Colours of Love*. Ontario: New Press.
- Long, B. 1983. A steady boyfriend: A step forward resolution of the intimacy crisis for American college women. *Journal of Psychology*, 115, 275-280.
- 増田匡裕 1994. 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究，34，p164-p182.
- 松井 豊 1990. 青年の恋愛行動の構造 心理学評論，33，p355-p370.
- 松井 豊 1993. 恋ごろの科学 サイエンス社.
- 松下姫歌・橋村裕治 2009. 大学生の自己愛傾向と自我同一性との関連について 広島大学心理学研究，8，p271-p280.
- 松下姫歌・吉田愛 2010. 大学生における友人関係と自我同一性との関連 広島大学心理学研究，9，p207-p216.
- 西山修・富田昌平・田爪宏二 2007. 保育者養成校に通う学生のアイデンティティと職業認知の構造 発達心理学研究，18(3)，p196-p205.
- 大野 久 1995. 青年期の自己意識と生き方. 落合良行・楠見孝(編)，講座生涯発達心理学：4 自己への問い直し：青年期 (p89-p123) 金子書房.
- 園田直子・片岡 祥 2008. 展望のある関係・ない関係 - 関係版時間的展望体験尺度 (Experimental Time Perspective Scale in Close Relationships: ETPS-CR) の作成 -
- Sternberg, R. J. 1986. A triangular theory of love. *Psychological Review*, 93, p119-p135.
- Sternberg, R. J. 1997. Construct validation of a triangular love scale. *European Journal of Social Psychology*, 27, p313-p335.
- 多川則子・吉田俊和 2002. 親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響 - 青年期の恋愛関係と友人関係 - 対人社会心理学研究，4，p65-p73.
- 多川則子 2003. 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的研究 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学，50，251-267.
- 谷 冬彦 2001. 青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成 教育心理学研究 49 (3)，265-273.
- 立脇洋介 2005. 異性交際中の出来事によって生じる否定的感情 社会心理学研究，21，p21-p31.
- 立脇洋介 2007. 異性交際中の感情と相手との関係性 心理学研究，78，p244-p251.
- 山田みき・岡本祐子 2008. 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ：対人関係の特徴の分析 発達心理学研究，19 (2)，108-120.
- 山本彩留子・岡本祐子 2009. 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ，対人態度の関連性 広島大学心理学研究，8，p107-p120.

Effect of the love relationships on the development on the young people

— from the relation among ego identity and lover's presence, the length of the relation, the three components of the love —

SHO KATAOKA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

NAOKO SONODA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

The purpose of this study investigated the influence of the love relationship on the young person's development. The Multidimensional Ego Identity Scale (MEIS) was used as a young person's development index. The subjects were 129 university students. We examined whether there was a difference in the score of the MEIS by lover's presence, a significant difference was not seen. Moreover, the participant having the lover was divided into two groups by the difference of the length of the relation, and the scores of the MEIS of the two groups with the long relation period and the short relation period were compared, the significant difference was not seen. In addition, the relation between the three components of the love (intimacy, passion, and commitment) for the lover and the MEIS was examined by multiple regression analysis, a positive relation was seen between MEIS and intimacy, passion. These results suggested that constructing an excellent love relationship works profitably to the development of the young person.

Key words: the love relationships, ego identity, the three components of the love, lover's presence, the length of the relation